

看護地域連携センター報告書

令和6年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和6年度事業報告	2
1.	なごや看護実践セミナー	2
1)	訪問先でも慌てない！～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないためのアセスメント力を身に付けよう！	
2)	もう困らない！せん妄対応のファーストステップ	
3)	現場に生かせる認知症看護	
4)	急変させないためのアセスメント能力を高めよう	
5)	知っておきたい！高齢者と誤嚥性肺炎の関連性	
6)	心不全を知ろうー地域で心不全患者を支えるためにー	
7)	臨床倫理の4分割表を使いこなす	
2.	看護研究のすすめ	15
1)	個別で看護研究	
2)	どうする看護研究	
(1)	リサーチクエスションのつくり方	
(2)	量的研究の基礎、統計の基礎	
(3)	質的研究の基本	
3)	出張研究セミナー	
3.	なごや看護生涯学習公開講演会	26
4.	地域連携セミナー	29
5.	看護研究サポート	32
6.	昭和生涯学習センター共催講座	34
III	今後の課題	38

名古屋市立大学大学院看護学研究科

名古屋市立大学病院看護部

名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部

名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院看護部

名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院看護部

I はじめに

名古屋市立大学看護地域連携センターでは、本学の地域への貢献をより強化するために、本年度も地域住民へのセミナーや講演会、臨床で働く看護職を対象にしたなごや看護実践セミナーや看護研究支援等、様々な活動をメンバーで工夫を凝らし行いました。新型コロナウイルス感染症によるイベント開催制限の解消後は、対面型のイベントを増やすとともに、新型コロナウイルスの影響により発展したオンラインでの開催も組み合わせて、多くの参加者を見込めるよう努力を重ねました。

本センターでは、今年度の7月に専任の看護地域連携センター長が着任し、本格的な稼働を開始しています。5つの名市大附属病院の看護部と協力し臨床現場の現状や研究サポートニーズを調査したうえで、これらのニーズに沿ったプログラムを考案し、実施しており、今後も継続していきます。これまでも地域の看護職者や医療・保健・福祉職の方々と顔の見える関係を築き、様々な活動を通して、地域の看護職者や住民の皆さまと交流を図ってまいりました。今後も引き続き、皆さまと垣根のない関係を築き、研究成果の発信や最新の看護実践方法の共有など、積極的に取り組んでまいりたいと考えています。

本年度の成果は様々ではありますが、どの活動も委員が少しでも皆様のお役にたてるようにと思いながら取り組んだ活動です。以下に、今年度の活動を総括し、あわせて最後に今後に向けての課題を述べさせていただきます。

Ⅱ 令和 6 年度事業報告

1. なごや看護実践セミナー

担当：秋山明子、峯恵、小塚亜矢、高倉直美、石川裕子、桂田久子、山吹美貴

「なごや看護実践セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。今年度は看護実践セミナー7件を企画し、6件を開催出来た。また、開催方法は、対面3件、遠隔1件、ハイブリッド2件であり、大きな問題もなく円滑にセミナーを実施することができた。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
3月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集の検討
4月	テーマおよびセミナー担当者募集開始 テーマ申込み状況の把握、教室予約
5月	全テーマの開催日程、場所決定 チラシ、チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 参加申込方法（メール申込、名古屋市電子申請申込）の検討
6月	看護地域連携センターホームページで告知開始 参加者募集開始
7月	チラシ印刷発注 チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計157箇所） 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討 アンケートの検討 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表、受講カード、アンケートの決定 受講生に受講カードの送付
8月	講師依頼状発送
9月 ～12月	各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、事務に領収書の依頼セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載 ・訪問先でも慌てない！～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないた

	めのアセスメント力を身に付けよう！（10/5） ・もう困らない！ せん妄対応のファーストステップ（10/19） ・現場に生かせる認知症看護（10/27） ・急変させないためのアセスメント能力を高めよう（11/4） ・知っておきたい！高齢者と誤嚥性肺炎の関連性（11/9） ・心不全を知ろうー地域で心不全患者を支えるためにー（11/23） ・臨床倫理の4分割表を使いこなす（12/8）
--	---

2) 事業の実施状況

(1) 訪問先でも慌てない！ ～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないためのアセスメント力を身に付けよう！

講 師：石井房世（名古屋市立大学病院 集中ケア認定看護師）
清水真名美（名古屋市立大学病院 救急看護認定看護師）
鬼塚真実（名古屋市立大学病院 がん看護専門看護師）
吉村元輝（みんなのかかりつけ訪問看護ステーション）

日 時：令和6年10月5日（土）14時00分～17時00分

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 301 講義室

募集人数：50名

参加者：9名

参加費：3,000円



〈内 容〉

セミナーの構成は講義と演習の2部構成とし、講義で学習した内容を演習で活用し、学習効果を高める形式をとった。

講義の内容は、①電話相談時の意識レベルの確認の重要性②痛みの緊急度判断の方法（LQQTSAを活用した sudden onset の確認）③発熱の緊急度判断の方法（敗血症の鑑別を軸とした qSOFA の活用）④呼吸困難の緊急度判断（フィジカルアセスメントの活用）⑤医師への報告方法（SBAR の活用）の5項目とした。

演習は4つの事例を通して①電話相談時の意識レベルの確認ができ、緊急の状態あるか判断できる②LQQTSA に沿って情報収集できる③緊急度のアセスメントができる④SBAR に沿って医師に報告ができる、の順に沿って難易度を段階的にステップアップし、1つの演習に対する学習目標を1～2個とし、受講生が学ぶポイントを明確にした。知識の定着を図るため、①受講生が自分の考えを言語化する②グループワークで自分の考えを他者に伝え、ディスカッションするという方法で演習を行った。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

上記5項目について講義をする過程で、1項目終わる度に理解度を確認し、質問の有無を確認しながらすすめることができた。出席した受講生から質問もあり、質問の内容から受講生が現場のどのような場面で困難さを感じているかを知る機会となった。夜間対応が重なり、多重課題となった際の優先順位の考え方について、次年度の内容に追加することも検討する。

昨年度、受講生が講義内容を活用することなく、普段の思考で演習の回答に答える場面があったため、演習開始時に講義内容を活用して考えることを強調して伝えたが、今年度も同様の場面があった。演習開始時だけでなく、講義中も説明を加えるなどして、受講生にわかりやすくするための工夫が必要である。



〈アンケート結果〉

当日参加者 9 名のうち、9 名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機は、「自分の看護のレベル・アップ」8 名、「新しい知識を得る」2 名、「興味・関心があった」2 名であった。セミナーの内容は「わかりやすかった」6 名、「どちらかといえばわかりやすかった」3 名、と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・グループワークもあり、知識を落とし込みやすかった。
- ・問診のしかたが分かりやすかった。
- ・事例で確認できたので実践に繋げることができそう。
- ・評価の指標などの枠組みが分かり、すぐに実践できる内容でとても良かったです。
- ・24 時間緊急電話当番時の対応に役立てられると思う。

(2) もう困らない！ せん妄対応のファーストステップ

講 師：門井真衣（東部医療センター 老人看護専門看護師）

日 時：令和 6 年 10 月 19 日（土）13 時 00 分～16 時 00 分

場 所：Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：15 名

申 込 者：1 名

参 加 費：3,000 円

最少催行人数に達しなかったため、今年度は開催できなかった。

(3) 現場に生かせる認知症看護

講 師：蟹江梓

（名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院 認知症看護認定看護師）

日 時：令和 6 年 10 月 27 日（日）10 時 00 分～15 時 00 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室

募集人数：20 名

参 加 者：2 名

参 加 費：4,000 円

〈内 容〉

1.わたしたちの困りごとと患者さんの困りごと 2.日本の高齢化と認知症について
3.認知症の中核症状から困りごとを紐解く 4.4 大認知症の特徴 5.認知症者とのコミュニケーション 6.BPSD とはなにか～看護と治療～について概説した。

参加者に看護補助者さんもいらっしゃると事前に伺っていたので、具体的な関わり方が体験してもらえるよう、コミュニケーションでは演習中心におこなった。また、各単元の内容の導入や復習の動画視聴を盛り込みながら、おこなった。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

参加者の方は、2名であった。そのため、直接「どんなことに困っているのか？」話を伺いながら、すすめていった。しかし、演習も二人で実践してもらうことになり、講師にみられているという感覚になり、やりにくいと感じやすい環境であった。講義も1日かかりということで、参加しにくい時間帯であったかもしれない。しかし、動画視聴中、泣いてくれる場面もあり、なにかしら講義の内容を現場に生かしてもらえないか考える。



〈アンケート結果〉

参加者2名のうち、2名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機は、「自分の看護のレベル・アップ」1名、「興味・関心があった」1名であった。また、セミナーの内容は2名全員が「わかりやすかった」と回答した。



(4) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう

講 師：加藤紀子、寺澤涼子、稲尾景子

(名古屋市立大学病院 救急看護・小児救急看護認定看護師)

日 時：令和 6 年 11 月 4 日（月）9 時 30 分～15 時 00 分

場 所：名古屋市立大学西棟 シミュレーションセンター多目的室

募集人数：12 名

参 加 者：3 名

参 加 費：5,000 円



〈内 容〉

このセミナーは、受講生が患者の急変前徴候に気づき、適切な処置を行い、医師などに報告することで、患者が防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害に至らないように対応できる能力を身につけることを目的としている。患者急変対応コース for Nurse ガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義され、心停止の 6～8 時間前には何らかの徴候が出ていると言われている。私たち看護師がその徴候を見逃さないためには、患者の変化に気づき、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

急変前徴候に気付けるかは観察者である看護師の予測範囲によって異なるため、看護師は常日頃から急変に備えて患者を観察、評価する能力を向上させることが必要である。このセミナーでは、看護師が系統的に観察できるよう迅速評価、一次評価について学習する内容となっている。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことで、患者に「死に結び付く可能性のある危険な徴候」があるか判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合は BLS を実施し、心肺停止状態ではないが、危険な徴候がある場合は、

応援要請をしながら、詳しく患者の状態を把握するために一次評価を実施する。一次評価では、簡単な器具（血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。このような内容について、今後臨床場面で実践できるようなセミナーの構成とした。

セミナーの構成としては、講義のあと、講義内容を思い出すための演習、実際に動画を視聴しながら、迅速評価・一次評価を実践する演習で段階を経て知識を習得できるようにした。また、SBAR 報告について、講義と演習を行うことでスキル習得の場とした。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

参加者は病院勤務であり、それぞれの臨床現場での行動や観察に照らし合わせながらディスカッションできていた。講義だけでなく、アウトプットの演習時間を長めにとることで知識の定着を図ることができた。グループディスカッションでは、それぞれ話合った内容を発言することができていた。また質問に対してタイムリーに解決をしながら進行し、急変前徴候の観察ポイントや報告について学べたことで、現場での活用や教育にいかしたいという受講生の反応を得ることができた。



〈アンケート結果〉

参加者 3 名のうち、3 名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」1 名、「興味・関心があった」1 名、「その他」1 名であった。また、セミナーの内容は 3 名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・とても分かりやすく、もう一度参加したいと思いました。

(5) 知っておきたい！高齢者と誤嚥性肺炎の関連性

講 師：山崎美代、池田真弓

(名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院 摂食嚥下認定看護師)

鈴木千世

(名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院 認知症看護認定看護師)

日 時：令和6年11月9日(土) 13時00分～15時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室

募集人数：30名

参加者：14名

参加費：2,000円



〈内 容〉

①高齢者の特徴と認知症についての基礎知識②嚥下障害と誤嚥性肺炎の基礎知識、高齢者の嚥下障害の特徴③嚥下の評価方法と誤嚥性肺炎の予防策の3部構成となっていた。

①については加齢に伴う感覚機能の低下、運動機能の低下、皮膚のセンサー機能低下、消化吸収機能の低下を説明し、特に運動機能の低下と消化吸収機能の低下が誤嚥性肺炎の誘因となることについて紹介した。また、認知症の診断基準、認知症者のアセスメントに必要な情報、認知症高齢者に必要な情報の取り方のポイント、認知症の症状と環境との関係、アルツハイマー型認知症の自然経過、抗認知症薬について、認知障害を引き起こす可能性のある主な薬剤、解熱鎮痛薬とせん妄・不眠時に用いられる薬剤、脳血管性認知症の特徴、レビー小体型認知症の特徴・治療・ケアについて説明した。

その後、嚥下スクリーニングテスト、誤嚥性肺炎の予防の3つの柱と4つのケアの工夫、誤嚥リスクを減らす食事介助方法、誤嚥しても喀出するための訓練、栄養管理とリハビリテーションについて発表スライドを用いて説明した。

・4つの嚥下スクリーニングテストの方法を説明し、受講者同士で演習を行った。

- ・誤嚥性肺炎は抵抗力と侵襲性のバランスが崩れた時に発症し、個人の免疫力を高め、侵襲性を減らすケアが必要であることを概説し、侵襲性を減らすケアとして、誤嚥を減らすための食事介助方法や咳嗽力の維持・向上を目指した訓練を説明した。
- ・食事介助は、実際の嚥下造影検査の動画を用いて、頸部と体幹の姿勢調整の効果を説明した。
- ・中高齢入院患者における排痰能力の水準に関する報告を紹介し、誤嚥時の咳嗽力の重要性について説明した。
- ・ACP支援の一助となるように、高齢者の誤嚥性肺炎による入院と生存期間のコホート研究を紹介した。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

認知症に関する講義は初めの30分だったため、理解についての内容は誤嚥性肺炎の内容が多く、認知症の理解度についてはアンケートからは考察できなかった。今後期待する講義内容のテーマについて、認知症患者への対応の希望があったため、今後機会があればセミナー開催を検討していきたい。

セミナー全体では、時間が15分程度超過してしまい、質問を受けることができなかった。しかし、アンケートから嚥下スクリーニングテストの実践や、嚥下の動画があってわかりやすかったとの意見があり、受講者の理解がまずまず得られていたと推察される。また、説明が早くて追いつかなかったとの意見があり、講義の時間配分の再考が必要であると考えられた。

今後の看護実践セミナーで希望するテーマの中に、嚥下機能低下の予防や食前のリハビリなどについてとあり、臨床現場では超高齢化にともなって嚥下障害を有する方に触れる機会が多く、「食」について考える医療・介護職者が増えていると思われた。そのため、今後は、臨床ですぐに実践できる嚥下の間接訓練が演習などに必要であると考えた。

〈アンケート結果〉

参加者 14 名のうち、12 名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機で最も多かったのは「興味・関心があった」8 名であった。また、セミナーの内容は 12 名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・画像を見られてとても理解しやすかった。
- ・実技もあってわかりやすかったです。臨床でも実践したいと思います。
- ・嚥下評価について積極的にとりくみたいと思った。

(6) 「心不全を知ろうー地域で心不全患者を支えるためにー

講 師：川瀬麻友香（名古屋市立大学病院 慢性心不全認定看護師）

日 時：令和 6 年 11 月 23 日（土）9 時 00 分～12 時 00 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室、
Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：20 名

参 加 者：7 名

参 加 費：3,000 円



〈内 容〉

講義内容の構成は、①心不全の概要と病態、②心不全の治療、③心不全の療養指導、④緩和ケアの 4 項目とした。まず①心不全の概要と病態について、日本循環器学会・日本心不全学会の定義のもと「だんだん悪くなる」疾患であるということに焦点をおいて説明した。また、心不全の治療や療養指導について理解しやすいように、心不全の症状に焦点をおいて説明するとともに、心不全の分類について心不全治療のアルゴリズムと

関連させながら説明した。その内容をもとに②心不全の治療は、日本循環器学会・日本心不全学会のガイドラインをベースとして現在の日本で行われている標準的治療(主に薬物療法)について現場でよく使われている薬剤をピックアップし説明した。①②に関しては聴講を主体とする講義形式で実施した。③心不全の療養指導では実際の実践現場での場面を想起しやすいように模擬事例を提示して、中範囲理論を活用しながら療養指導におけるアプローチポイントのを見つけ方に着目した。療養指導の内容については、現在当院でも使用し臨床現場でも使用されていることの多い日本心不全学会「心不全手帳(第3版)」の内容を主体として行い、心不全手帳の内容の解説や活用方法について講義を行った。最後に、緩和ケアについては心不全における緩和ケアの現状とともに当院で実際に経験した症例を提示した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

今回は聴講を主体として講義を行ったため、講義中は配布資料を見ながら時折メモを取っている様子が見受けられた。講義の最後に質問の時間を設け、療養指導や緩和ケアに関する質問が多かった。また、休憩時間中に実践現場の患者との関わりに関する困りごと(水分管理をどこまで厳密にするべきか)について1件相談を受けた。今回は昨年度のアンケート結果も踏まえて、ハイブリット形式で行った。途中パワーポイントの画面が点滅してしまうトラブルが何度かあり、私自身もZOOMのホスト管理が不慣れであったため、焦りもあいまって時間配分がうまくできなかったこと、昨年度のような受講者を巻き込んだ講義が出来なかったことが反省点である。昨年度に続き、参加者は訪問看護師など地域の方が多かった。高齢心不全患者が増加傾向にあることや、退院後も自宅で疾患管理が必要な疾患であることから、地域でのニーズがあるのだと考える。今回は緩和ケアを追加したが、地域のニーズに合わせて内容を検討していきたいと考える。

〈アンケート結果〉

参加者7名のうち、6名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機で多かったのは「自分の看護のレベル・アップ」4名、「興味・関心があった」4名であった。また、セミナーの内容は6名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・具体的な症例で分かりやすかった。心不全がだんだん悪くなる病気ということがよく分かった。
- ・今後患者指導をする際に、受診動機などから何が必要な指導なのかを見極めていきたい。

(7) 臨床倫理の4分割表を使いこなす

講師：澤田美和(名古屋市立大学大学院看護学研究科・助教)

日時：令和6年12月8日(日)10時00分～15時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 402講義室、

Zoomによる遠隔ライブセミナー形式

募集人数：1部のみ上限なし、1部2部10名

参加者：1部のみ8名、1部2部11名

参加費：1部のみ2,000円、1部2部4,000円



〈内 容〉

第1部の講義内容は、Jonsenの臨床倫理の4分割表（第5版）に基づき、医学的適応・患者の意向・QOL・周囲の状況で示されている28項目に沿って、考え方のポイントを解説した。

第2部では、臨床において誰もが経験すると思われる架空の事例を提示し、臨床倫理の4分割表を用いて1事例を2時間かけてじっくり議論した。まず、参加者の心理的安全性を担保し、講師がファシリテーター・書記・解説の3役を担いながら議論を進めた。議論で出た意見をパワーポイントスライドに打ち込み、タイムリーにスライドに映し出しながら進行をした。また、研修終了後にスライドデータをメールで添付することを事前に伝え、議論に集中できるよう配慮した。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

今年は、昨年よりさらに参加人数が増え、愛知県外からの参加もあった。第1部終了後の質疑応答の時間帯には、所属組織で直面している倫理的葛藤について質問があった。このため来年度の第2部の事例は、参加者の中から検討したい事例を募り、参加者で検討していく形式を検討したいと考える。なお、検討する事例は1～2事例程度であるため、多くの事例が提出された場合にもすべての事例にコメントできるよう準備をする。

〈アンケート結果〉

当日参加者 18 名（第 1 部のみ 8 名、第 1 部第 2 部 11 名）のうち、16 名からアンケートの回答があった。セミナー参加動機で最も多かったのは「自分の看護のレベル・アップ」14 名であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」14 名、「どちらかといえばわかりやすかった」2 名と回答した。

3) 課 題

今年度は、7 件のセミナーを企画し、5 件のセミナーを開催出来た。開催方法は、対面 4 件、ハイブリッド 2 件、遠隔 1 件であった。今年度の全セミナーの参加者数は 54 名であり、昨年度と比較して参加者数が微減した。各セミナーの内容は丁寧でわかりやすかったため、いずれのセミナーも高い評価であった。一方で、最少催行人数(申込者 3 名未満)に満たなかった 1 件のセミナーは残念ながら中止となった。

次年度については、引き続き、関心の高いテーマ設定、広報の対象範囲の検討、広報の強化などを通して、多くの看護職が参加でき、満足してもらえるセミナーの開催を目指していきたい。セミナーの申込者数が微減傾向にあること、申込者が最少催行人数に達しなかったために中止になったセミナーについては、原因等を精査していく必要がある。

2. 看護研究のすすめ

担当：江啓発、中村美鈴

本事業は、(1) 研究の個別相談、(2) 看護研究基礎セミナー、(3) 出張研究セミナーの3つの活動から構成され、主に看護職者の研究活動を推進する目的にて開催している。研究する面白さを発見し、研究の興味を高めることで、看護研究を目指す人材の育成に寄与することを期待する事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
12 月	次年度開催時期、方法、内容の検討
1 月	次年度開催の検討
2 月	次年度チラシ案、担当者、開催時期の検討
3 月	次年度チラシ案、タイトルの決定 「研究の個別相談」「出張研究セミナー」チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計 126 箇所） 看護地域連携センターホームページで告知開始 参加者募集開始
4 月	チラシ、チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 場所決定、教室予約 【研究の個別相談】 4 月 23 日（火）9:00～16:00
5 月	「看護研究基礎セミナー」「研究の個別相談」「出張研究セミナー」チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計 159 箇所）
6 月	アンケートの決定 看護研究基礎セミナー：申込者へメール配信
7 月	業務マニュアルの決定 【出張研究セミナー】 7 月 9 日（火）
7 月 ～9 月	各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載 【看護研究基礎セミナー】 ・「リサーチクエスションの作り方」（7/19） ・「量的研究の基礎、統計の基礎」（8/24） ・「質的研究の基本」（9/12） 【出張研究セミナー】 ・申込時に対応

10 月	【研究の個別相談】10 月 17 日（木）9:00～16:00
11 月	「研究の個別相談」チラシ案の検討
12 月	次年度開催案の検討
1 月	次年度開催案の検討
2 月	次年度開催案の検討
3 月	次年度開催の検討

2) 事業の実施状況

【研究の個別相談】

実施日は、4 月 23 日、10 月 17 日の 9～16 時で事前予約（午前中）および当日受付（午後 14 時 40 分～16 時 10 分）、2 月 19 日の 9～16 時で事前予約の合計 3 日間を予定した。

4 月 23 日は宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）、井上高博（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）、江啓発（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）が対応し、10 月 17 日は江啓発（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）が対応し、2 月 19 日は久保田正和（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）が対応した。

結果、4 月 23 日は当日受付 1 件、10 月 17 日は予約 3 件、2 月 19 日は予約 1 件であった。

〈アンケート結果〉

4 月 23 日参加者 2 名、10 月 17 日参加者 5 名、2 月 19 日参加者 1 名からアンケートの回答があった。個別相談の概要は「研究の背景、目的の内容についての流れと矛盾点の洗い出し」、「スタッフが取り組んでいる研究に関して。研究の方向性、仮説、患者選出方法、インタビューに関することなど。」であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・研究計画書の内容について具体的に細かくアドバイスをして頂き方向性が考えることができました。
- ・相談をしていくうちに、自分の中でしたいことがはっきりしてきたと感じました。対象者の選出方法について悩んでいたので助言を頂き、ぜひ取り入れたいと思いました。
- ・とても丁寧に教えていただき、研究初心者としては、進め方や考え方が分からなかったため、有意義な学びがある機会でした。病院ではクリニカルクエスションの段階で相談することができないため、初めの段階で相談できることがとても貴重でした。

【看護研究基礎セミナー】

(1)「リサーチクエスションのつくり方」

講 師：井上高博（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和6年7月19日（金）10時～12時

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 308 講義室

募集人数：12名

申 込 者：10名

参 加 者：10名

参 加 費：2,000円



〈内 容〉

7月19日（金）10時～12時 桜山キャンパス 402 教室にて、ハイブリッド方式で開催した。参加者は10名（対面2名、ZOOM8名）であり、同病棟で研究をすすめていく2チーム（各3名：6名）と個人で研究を構想中の4名であった。

最初に、リサーチ・クエスション（研究の問い）の考え方と立案方法について、1）研究で明らかにしたいことを宣言した40字以内の短文であること、2）研究計画に最低限必要な要素が入ることを説明した。

次に、根拠に基づいた看護について説明し、個人・集団への看護（医療）行為がより良い健康状態をもたらす確率を高める事であり、最新の専門知識は生まれないこと観点から、研究を行う意義を話した。また、量的研究および質的研究のとらえ方についても、実際の論文を用いて説明した。

最後に、参加者の研究疑問（クリニカルクエスション）について、話してもらい、情報共有を図ったうえで、リサーチクエスションへの変換のアドバイスを各参加者（チーム）へ行い、質疑応答もおこなったうえで時間となり終了した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

研究に関して、積極的な質問や疑問があり、そのことについて話し合ったことから、大きくうなづいたり、納得された様子がうかがい知れた。良い講義内容であったと考える。



〈アンケート結果〉

参加者 10 名の内、8 名からアンケートの回答があった。セミナーの内容はわかりやすかったかは、8 名全員が「わかりやすかった」と回答した。また、セミナーの内容は今後にいかすことができるものかは、「そう思う」7 名「どちらかといえばそう思う」1 名、と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・直接、先生からお話を伺う時間を頂けたことや、他部門の方々の疑問を聞く事ができて大変ためになった。
- ・研究を進めていくとテーマの軸がぶれる事で最初にやりたかった事と大幅にずれる事が悩みであった。先生のお話を聞き大変、参考になりました。
- ・基本的な講義でしたのでスタッフも理解でき進めていけそうです。また私も支援していく上で参考になりました。

(2)「量的研究の基礎、統計の基礎」

講 師：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

江啓発（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

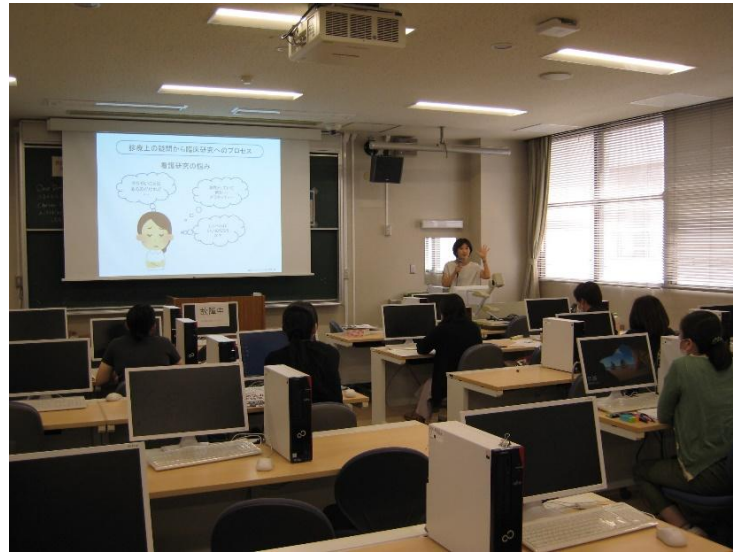
日 時：令和 6 年 8 月 24 日（土）9 時 00 分～12 時 20 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：12 名

参 加 者：7 名

参 加 費：4,000 円



〈内 容〉

8月24日（土）の午前中に、「研究基礎セミナー」の第二弾として、「量的研究の基礎、統計の基礎」をテーマに講習を実施した。対面での受講者は7名であった。本講習は二部構成となっており、短時間での開催であったため、量的研究の実践より、量的研究の基本知識を習得し、量的研究の考え方を理解することを目的とした。

前半は江准教授が担当し、主に疫学および統計学の基礎について講義を行った。後半は金子教授が担当し、看護研究におけるデータの扱いについての説明、および無料統計ソフト **EZR** の基本的な機能の紹介と演習を行った。

当日の講習概要は以下の通りである。

1) 疫学と統計学

- ・ 量的研究、疫学、統計学の違いについて受講者に考えさせた上で、疫学と統計学の関係について概説。
- ・ 疫学研究の研究デザインについて説明（観察研究と介入研究の考え方、および観察研究の具体的なデザインの種類）。
- ・ 統計学の基礎について講義。特に、統計学でできること・できないことについて意識させ、量的研究を行う上での重要な注意点を説明。
- ・ データ解析の前段階として、量的データの種類、データの構成、標本の抽出（サンプリング）について説明。
- ・ 統計学における推定と検定の基本的な概念を解説。

2) 看護研究におけるデータの考え方、**EZR** の演習

- ・ リサーチクエスションの設定からデータ収集までのプロセスについて説明。
- ・ 量的データの種類や適切な分析方法について紹介。
- ・ 保健医療分野で広く使用されている無料統計ソフト **EZR** を用い、簡単で実用的な機能の紹介を行い、受講者が実際に操作できる演習の時間を確保。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

統計学の内容については、受講者の統計に対する知識や抵抗感にバラツキがあり、全員が均等に理解できる講義を提供することの難しさが見受けられた。特に、後半にかけて1～2名の受講者が講義の内容についていくのが難しくなった様子が見られた。アンケート調査の結果からも、「とても分かりやすかった」との意見がある一方で、「難しかった」との意見もあり、受講者の理解度に差があることが確認された。

この点について、講習終了後の看護地域連携センター運営委員会でも議論が行われ、一回限りの短時間講習では十分な理解が難しい受講者もいるため、今後は複数回に分けたシリーズ形式でのレクチャーを提供することが解決策の一つとして考えられる。

また、例年の「研究基礎セミナー」の演習では Excel を使用していたが、今年は保健医療分野で広く活用されている無料統計ソフト EZR の紹介を含め、Excel を使用しなかった。受講者からは、統計ソフトを用いた実習が実践的で良かったとの意見もあったが、ソフトの操作に慣れていない受講者にとっては難しく感じられた可能性もある。今後は、EZR の基本操作を事前に学べる資料の配布や、初学者向けの補助的な説明の充実などが望まれる。

今回のセミナーの結果を踏まえ、次回以降の講習では、受講者の統計学の理解度に応じた補助教材の充実や、より多くの演習機会を設けることで、受講者全員が基礎的な量的研究の知識を確実に習得できるよう改善を図りたい。



〈アンケート結果〉

参加者7名からアンケートの回答があった。セミナーの内容はわかりやすかったかは、「どちらかといえば難しかった」3名、「難しかった」2名、「わかりやすかった」1名、「どちらかといえばわかりやすかった」1名であった。また、セミナーの内容は今後にいかすことができるものかは、「そう思う」6名、「どちらかといえばそう思う」1名と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ ゆっくりと基本的なことを説明していただいた。
- ・ 統計はとても苦手意識のある分野ですが先生の説明はわかりやすかったです。
- ・ 統計学は難しいが、全くわからなかったことが、少し理解ができた気がした。EZRは今後使ってみようと思う。

(3) 「質的研究の基本」

講 師：大橋麗子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日 時：令和6年9月12日（木）10時00分～15時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室、
Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：20 名

参 加 者：13 名（対面 5 名、Zoom 8 名）

参 加 費：4,000 円



〈内 容〉

- 1) 講義内容項目
 - (1) 質的研究とは
 - (2) 質的研究のプロセス
 - (3) アイディアからリサーチクエスションへ
 - (4) 研究方法を考える
 - (5) データ収集
 - (6) データ分析
 - (7) コード化、カテゴリ化を体験してみよう！（演習）
 - (8) 分析結果の解釈
 - (9) 質的研究の「質」を確保するために

2) 講義概要

研究計画、実施、発表の実際行う順序に沿って、講義を構成した。

まずは、質的研究にはどのような特徴があるのか、どのようなリサーチクエスションに適しているのか、量的研究との違いはなにかについて説明を行った。質的研究の方法論については、前段階である日常の実践での気づきをどのようにリサーチクエスションに昇華させるのかについても説明を行った。研究方法については、実際の研究論文を示しながら、各研究方法の特徴や留意点、難易度を講義し、特に初学者が取り組みやすい研究方法については具体的に紹介した。データ収集方法については、基礎的事項をおさえながら、インタビューによるデータ収集方法について具体例を紹介し、実際のデータ収集における注意点などを講義した。データ分析については、コード化、カテゴリ化について説明後、実際のデータを用いて演習を行い、参加者にコード化、カテゴリ化を体験していただいた。演習については、講師が行ったコード化、カテゴリ化、図解化、ストーリーラインの例を示した。最後に、質的研究の「質」を確保するための視点と方法について講義を行った。

講義とあわせて、看護研究サポート、個別看護研究サポート、出張研究セミナーの案内も行い、どのタイミングでどのような人が利用すると効果的かについても説明した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

ハイブリッドでの開催を設定したところ、対面 5 名、遠隔 8 名となった。遠隔参加者は、東京都、和歌山県、宮城県、長野県からの参加もあり、遠隔でなければ参加がなかったと予測できる。今後も遠隔での開催を行うことで、県外からの参加を見込める可能性がある。ただし、遠隔よりも対面での参加者からより活発な質問があり、対面で行う意義も感じられた。

参加者の条件としては、研究経験が全くない方、現在研究を進行中の方、施設内で研究支援を行う立場にある方など様々であった。アンケート結果からは、「わかりやすかった」「今後の活動に活かせる」との評価を得ており、参加者のニーズにあった講演を実施できたと考える。

質問では、研究倫理についてが多く、「研究撤回をどの段階まで認めるか」や「協力者への心理的侵襲に対する対策」などがあった。

〈アンケート結果〉

参加者 13 名のうち、10 名からアンケートの回答があった。セミナーの内容はわかりやすかったかは、「わかりやすかった」7 名、「どちらかといえばわかりやすかった」1 名であった。また、セミナーの内容は今後にいかすことができるものかは、「そう思う」8 名、「どちらかといえばそう思う」2 名と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・質的研究の概要がわかった。
- ・基本的な部分の説明であり、わかりやすかった。
- ・先生ご自身の研究をもとに説明をしていただいたため、わかりやすかった。
- ・勇気をもって自分の熱量が維持できるような研究をみつきたいです。
- ・とても分かりやすかったです。研究の相談窓口の案内も今後の助けになりそうです。

【出張研究セミナー】

講 師：金子典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日 時：令和 6 年 7 月 11 日（木）15 時 00 分～16 時 00 分

場 所：社会福祉法人 京都社会事業財団 京都からすま病院

参 加 者：14 名

参 加 費：1,000 円



〈内 容〉

テーマを「看護研究ことはじめ -研究疑問の絞り込みから質問紙の作成まで- 」とし、テーマの絞り込みや研究の進め方について講義しました。14 名、病院副院長や看護部長の参加がありました。講義後は、質問相談の時間を設け、個別に助言も行われました。看護研究への理解が深まったセミナーとなりました。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

看護師、医師、理学療法士の参加がありました。どうすれば、患者さんや家族のケアの質を向上できるかを真摯に考えておられ、鋭い質問が多く寄せられました。下記のような感想が寄せられ、講義の後も質問対応を行いました。講義終了後も、学会発表や論文での発表に向けた支援を続けています。臨床現場の看護師の底力を感じる大変有意義な機会となりました。

〈アンケート結果〉

参加者 14 名からアンケートの回答があった。総合的な評価は、「とてもよい」9 名、「よい」4 名であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・日々私たちが行っているケアについて、疑問を持ち、考える時間を持ち、研究評価し、質の高いケアを行えるようにしていきたいと思います。
- ・研究はとても苦手でしたが、やる気がわきました。
- ・入職してすぐのため、まだ研究を行ったことがないですが、今日のお話を思い出して、これからの研究に活かそうと思います。
- ・看護研究！と言われると、何か大きなことに取り組みなければいけないと思い難しく硬く考えすぎてしまいます。先生のようにフランクに相談にのってくれるアドバイザーがいてくださったら心強いと思いました。

3) 課 題

今年度は、研究の個別相談 3 件（対面 2 件、Zoom 1 件）、看護研究基礎セミナーで「リサーチクエスションの作り方」10 名（対面 2 名、Zoom 8 名）、「量的研究の基礎、統計の基礎」7 名（対面のみ）、「質的研究の基本」13 名（対面 5 名、Zoom 8 名）、また、出張研究セミナー1 件を実施した。

研究の個別相談の件数は少なく、相談内容は研究の基礎的な内容が中心であった。参加者からのアンケート結果より、概ね満足度が高いことが示された。また、看護研究基礎セミナーについても、一定数の参加があり、アンケート結果より、有意義な活動内容であったと考えられる。

今年度、7 月 1 日に看護地域連携センターの新しいセンター長、久保田先生が着任され、研究の個別相談の 3 回目を担当されるとともに、次年度に向けた事業の実施方式の見直しを行った。これにより、来年度からは研究の個別相談を以下の形式で実施する予定である。①センター長が名古屋市立大学病院、西部医療センター、東部医療センター、みらい光生病院、みどり市民病院に各 1 回出張し、個別相談を実施する。②桜山キャンパス看護棟でセンター長が年 1 回個別相談会を実施する。したがって個別相談会の実施回数は年間 6 回に増加する。

また、看護研究基礎セミナーについては、「リサーチクエスションの作り方」および「量的研究の基礎」に関連するテーマを、センター長が講師を務める形で引き続き実施すること。受講料は今年度と同様に無料とする。さらに、「量的研究」に関するセ

ミナーについては、今年度の受講者の意見を踏まえ、異なるレベルの受講者のニーズに応じた内容や実施方法を検討する必要がある。

3. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：小山晶子、峯恵、山吹美貴

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、2019年度より、なごや看護学会との共催事業となっている。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	テーマ・講師、開催時期について検討 会場予約
6月	講師・テーマについて検討
7月	講師派遣依頼の報告
9月	チラシ（案）の検討 チラシ送付先・印刷枚数の検討
10月	アンケート内容の確認 印刷発注（1,500部） 看護地域連携センターホームページ告知開始 チラシ納品、チラシ発送
11月	参加申込状況、準備状況の確認
12月	当日役割分担の検討 講師への最終確認書類の発送
1月	参加申し込み状況、準備状況の確認
2月	公開講演会実施 実施報告
3月	アンケート集計結果報告

2) 事業の実施内容

テーマ：優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード®

講師：内山亜紀子氏（国立大学法人 東京医科歯科大学病院 看護部 看護師長）

日時：令和7年2月12日（水）18:00～19:30

場所：名古屋市立大学病院 大ホール

参加費：なごや看護学会会員 500円 非会員 1,000円

参加者：105名

〈内 容〉

今年度は、東京科学大学病院看護師長・ユマニチュード認定インストラクターである内山亜紀子先生に、「優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード®」というタイトルでご講演をいただいた。対面による開催となり、内山先生による豊富な動画を用いた講演は、日々支援対象者との関わりに尽力している受講者にとって大変わかりやすい内容であった。受講者は100人を超え、大変盛況な講演会であった。



3) 参加者アンケート結果

参加者105名のうち、99名からアンケートの回答があった(回収率94.3%)。参加者は看護師53名(53.5%)と介護福祉士12名(12.1%)が多く、ヘルパーの参加もあった。講演内容について、「分かりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は97名(94.9%)とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・実際の映像を見ながらどこに気をつけるか、どう関わるかを教えてもらったので、ユマニチュードのポイントを知れて良かったです。
- ・大学の講義で興味を持ち、本日参加させていただきました。「ユマニチュードは素晴らしいと思うけれど、実際多忙な臨床では難しいのではないか」と思っていたが、今回の講演会を通して短い時間でも心がけていく4つの柱を意識して関わることで今までのケアの時間と大差なく取り入れていけるのだと学びになりました。
- ・ユマニチュードの技術は知っていたが哲学を知れたことで、技術の根拠が知れより深く学べた。
- ・仕事だけでなく、家族との対応の参考にもしたい。
- ・認知症の方や、高齢者が多く、ケアを拒否されることもあるので、実践してその患者が納得して、やってよかったと思えるようなケアや関わりを持ちたいと思った。
- ・相手の拒否のないようにと思いますが、拒否されると、相手に不快な思いをさせてしまっている対応もあると思い、今回の研修を参考にさせて頂きたいと思います。

4) 課 題

本年度は、受講者が 100 人を超え、大変盛況であった。平日夕方開催であったことに加え、臨床のニーズが高い内容であったことが要因にあると思われる。講演会のテーマを検討する際には、臨床のニーズを反映させる必要がある。

3. 地域連携セミナー

担当：大橋麗子、中村美鈴

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げ開催している。さまざまな立場の人が同じテーマについて考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待する事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
10 月	テーマ及び講師の検討
11 月	講演内容、日程等を講師と交渉 会場の決定 知の広場掲載依頼
12 月	チラシ（案）の作成と検討 チラシ送付先の検討 広報なごや3月号への掲載依頼
1 月	チラシ（案）の作成と検討 チラシ送付先の検討
2 月	チラシ(案)の決定 看護実践研究センターホームページで募集告知
3 月	チラシ原稿最終確認、印刷依頼（2,400 部）
4 月	チラシ発送 参加者募集開始（インターネット、メール、往復はがき） 参加申込者への参加の可否連絡
5 月	講師へ当日資料等の最終連絡
6 月	アンケート、役割分担の決定 事前受付リスト作成開始 領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施予定内容

テーマ：「不登校」：あなたはなにができるか？

～内的・外的要因を理解し「死」を防ぐ医療～

講 師：加藤善一郎氏（岐阜大学大学院医学系研究科 小児科学
岐阜大学大学院連合創薬医療情報研究科 構造医学 教授）

日 時：2024 年 6 月 29 日（土）13 時 00 分～15 時 00 分

場 所：名古屋市立大学病院 3 階大ホール

参加費：500 円

参加者：168 名（講演会関係者含む）



〈内 容〉

『不登校』：あなたはなにができるか？ ～内的・外的要因を理解し『死』を防ぐ医療～」をテーマとした講演を開催した。不登校の現状と要因、教育と医療の連携として求められる支援について、具体的事例による分かりやすいご講演により、不登校への理解を深めることができました。

3) 参加者アンケート結果

参加者 156 名のうち、132 名から回答があった（回収率 84.6%）。参加者は、一般の方が 54 名（40.9%）、医療・福祉職が 81 名（61.4%）であった。一般の方では会社員 13 名（9.8%）、医療・福祉職では看護職 19 名（14.4%）が最も多く、その他には学校教員（小中高等学校）、学生（医療福祉系）、養護教諭等が参加した。参加動機は「興味関心があった」70 人（53.0%）が最も多く、次に「新しい知識を得る」40 名（30.3%）であった。

以下に参加者の感想の一部を記す。

- ・現在の不登校の子どもをとりまく環境やそれに対する取り組みについて、事例を交えた現場レベルの話がきけて良かった。
- ・不登校児の親なので、子供への接し方など参考になることが多かったです。子どもに振り回されようと思いました。共感できる内容も多く、支えてくださる方々に感謝です。
- ・子どもの相談業務を行っている中で、不登校・域渋りの相談を多数受けており、内的要因・外的要因の考え方は実践レベルで参考になります。
- ・小児領域は、子どもの身体と心を両方診ることが重要であること、様々な特性をもつ子どもに対して、何でも今すぐできることを求めてはいけないということが印象

に残りました。子どもを尊重した関わりにおいて大切な視点だと感じました。

- ・将来、教師を目指す私にとって、学校の現状を知られてよかった。小児科医が学校へ行って相談を行っていることを知り、子、親、先生にとってもすごく心の支えになる取り組みだと思った。



3) 課 題

今回、「不登校」というテーマから、受講ニーズが高いと想定される当事者家族が参加するためには、自宅でも受講可能な遠隔開催も有効であると考えられる。今後は、講演テーマに合わせて、遠隔開催も検討したい。

5. 看護研究サポート

担当：保田ひとみ、大橋麗子、峯恵、小塚亜矢、高倉直美、石川裕子、桂田久子、山吹美貴

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。尚、2021 年度より本事業は「なごや看護学会」との共催事業になりました。

1) 事業実施の経緯

【2024 年度看護研究サポート】前期 4 件、後期 4 件

時期	内容
4 月	前期看護研究サポートの募集開始 (4/5)
5 月	前期看護研究サポートの募集締め切り (5/13 締め切り、4 件申込) 研究チームと教員のマッチング
6 月	前期看護研究サポートの開始
7 月	後期看護研究サポートの募集開始 (7/23) 「看護研究サポート教員 form」の一部修正
8 月	前期看護サポート状況の中間確認の実施 (8/7) 後期看護研究サポートの実施報告書提出依頼 (8/7)
9 月	前期看護研究サポート中間確認の結果報告 2023 年度後期看護研究サポート実施報告
10 月	後期看護研究サポートの募集締め切り (10/3 締め切り、4 件申込) 研究チームと教員のマッチング 前期・後期の「看護研究サポート教員 form」の統合
1 月	後期看護サポート状況の中間確認の実施 (1/10) 後期看護研究サポート中間確認の結果報告 (応募者 3 件)
2 月	前期看護研究サポートの実施報告書提出依頼 (2/5) 後期看護研究サポート中間確認の結果報告 (応募者 1 件) 次年度のチラシ配布について提案
3 月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ (2/28 締め切り)

2) 事業の実施状況

- ・応募者が、前期は 4 件、後期は 4 件あり、本事業の運営およびなごや看護学会と当センターとの連携は円滑に進められた。
- ・昨年度後期の 1 件は、順調に実施され期間内に終了した。
- ・看護研究サポート教員のオーサーシップについては、明確な取り決めは行わず、筆頭

著者との話し合いで決めることとなった。

- ・看護研究サポートの共同研究者については、なごや看護学会と調整することとなった。
- ・看護研究サポートの10時間を期間内に使用できない場合について問い合わせがあり、同センターで検討した結果、期間延長はしないこととなった。
- ・Zoomが必要になった場合は、本年度は看護学部で契約しているものを予約して使用すること、Zoomの使用が頻繁になる場合はTeamsを使用することが確認された。次年度のZoomの活用については、今後検討することとなった。

3) 課 題

- ・看護研究サポートの共同研究者については、なごや看護学会と検討する。
- ・次年の募集のチラシについて、サポート期間・回数・方法の見直し案をなごや看護学会に提案する。
- ・サポート期間が10か月では短いのではないかという意見があったため、今後検討する。
- ・次年度のZoomの活用については、今後検討する。

5. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：鏡裕行、保田ひとみ

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で10回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4 月	昭和生涯学習センター担当者と講座開催方法の検討 (実務は名古屋市教育委員会 生涯学習課が担当) 企画テーマと講師案の検討
5 月	会場の予約と会場下見・打ち合わせの日程調整 昭和生涯学習センター担当者へテーマ・講師案について相談・意見を依頼 講師との交渉開始(メール・電話で検討) 講座のねらい、コマタイトル・コマ毎のねらいを整備 テーマ、講師、開催日時の決定 知の広場掲載依頼
6 月	名古屋市へ企画表を提出(昭和生涯学習センター担当者)
7 月	企画表(昭和生涯学習センター担当者)を受け取り
8 月	広報、参加者募集開始(昭和生涯学習センター担当者) 講座案内のチラシデータ(昭和生涯学習センター担当)を受け取り
10 月	講師への依頼書発送(昭和生涯学習センター担当者)
12 月	申込状況確認
1 月	講座の運営開始(1/17, 1/24, 1/31, 2/7) 第1回公開講座実施報告
2 月	第2-4回アンケート結果確認・講師フィードバック確認
3 月	次年度以降の運営方法案提示(3/18 会議) 看護地域連携センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和6年度後期昭和生涯学習センター事業として、「健康寿命を延ばすためにできること ～健康増進のヒント～」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は65名であった。第2回～4回目は現地学習(受講料:900円)で、定員50名のところ83名の応募があったが、当日欠席者等があり、各回の受講者は47名(第2回)、44名(第3回)、42名(第4回)となった。

開催日時	内容	講師
1月17日 14:00-16:00	身体・認知機能低下予防のための運動	野嶋一平（名古屋市立大学大学院医学研究科・教授）
1月24日 14:00-16:00	シニアのための栄養管理	中井智子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・講師）
1月31日 14:00-16:00	私を悩ませる「頻尿」	窪田泰江（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）
2月7日 14:00-16:00	温泉の効能と楽しみ方	鏡裕行（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）



3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回目の公開講座は、受講者65名にアンケート用紙を配布し、65名から回答があった。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が65名、講座の満足度も、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が65名であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・とても良い話が聞けました。またこういう講座を開いてほしいです。（3件）
- ・説得力のある講義内容で感動した、出席してとても良かった。
- ・「0.2%の改善でも続ければ1年で2倍になる」という話がとても頭に残りました。（3件）
- ・なんとなく不安の多い高齢期ですが少し気持ちが軽くなる内容でした。

第2～4回目の現地学習は、第4回目の受講者42名にアンケート用紙を配布し、42名から回答があった。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が39名、講座の満足度は、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が38名であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・質問コーナーで多くの方が質問されていて関心が高いことに感心しました。どんどん新しい知識を身につけて充実した生活を送っていきたいと思います。
- ・体力が落ちてきて一人でくよくよするより、こうやって教えてもらえて良かった。
- ・第2回は栄養管理も入れて欲しかった。第4回は効能に絞って説明して欲しかった。
- ・共催講座は2回目の受講ですが、健康についての内容は高齢者にとって参考になる。
- ・栄養、運動、社会性の3つが大事だと教えてもらったが、具体的な内容が乏しい。
- ・毎回レジュメがあるので、集中して話を聞けてとても良かった。
- ・温泉の回は健康寿命とはあまり関係ない内容のように思いましたが、講義自体は面白かったです。
- ・知識だけでなく、日常にどのように取り入れるかという話をもっと知りたかった。



4) 課 題

昨年度に引き続き、教育委員会、昭和生涯学習センター、看護学研究科担当者の役割を一覧にし、5月に確認した。加えて担当者間で密な連絡を行い、円滑に運営できた。

西棟2階の会場（講義室A）は通常外部の方に開放していないため、案内に人員を要した。第1回目の公開講座の際は、昭和生涯学習センターより4名のスタッフ、学内より担当教員2名、事務1名にて誘導、運営を行った。その結果、受講者をスムーズに会場まで案内できた。

西棟講義室Aでの開催に伴い、西棟2階の男子トイレは開催期間中ずっと使用不可だったため、西棟3階および1階の男子トイレを案内した。第1回目の公開講座の際

は、途中のトイレ休憩を 5 分とっていたが、他の階への移動に時間を要することが分かったため、第 2 回目移行は、トイレ休憩時間を 10 分とることで対応した。

講座に関して、一部の受講者より、「公開講座は当選者の席を確保して余った分を一般公開にすべき（全回を通して話を聞きたい）」というご意見をいただいた。公開講座では当日参加も可能であるが、このことが十分周知されていなかった可能性も考えられるので、講座案内の説明を工夫する必要があるかもしれない。

Ⅲ 今後の課題

令和 6 年 7 月 1 日に専任のセンター長が着任し、インスタグラムの開設や HP の充実など、ウェブや SNS を活用した広報活動に力を入れました。同時に地域の病院や訪問看護ステーション、学校などは手紙や広報誌などの紙媒体を用いた連絡手段を用いている現状があるため、紙の広告やチラシを用いた広報も行う必要がありました。今後も数年間は同様の形で広報活動を進めていく予定です。

令和 6 年度もこれまで継続してきた従来通りのプログラムを中心に運営を進めてまいりました。

臨床家による看護職を対象としたなごや看護実践セミナーについては、昨年度と比較して参加者数が微減しました。セミナーは高い評価を得ているため、引き続き、関心の高いテーマを設定して継続していきますが、広報の強化や実施日時の検討を通して、多くの看護職が参加でき、満足していただけるセミナーの開催を目指していきたいと考えています。

看護研究のすすめは高い評価を得ています。しかしながら、対象の多くは病院の看護師であるため、勤務の都合上平日に個別相談やセミナーへの参加が難しいケースが多いです。また、臨床の看護師は看護研究に時間を割くことが難しい実態があります。今年度はセンター長が就任後に附属病院の看護部に出向き、どのような学習ニーズがあるか、看護研究について名市大看護学研究科に期待するプログラムやかかわりを尋ねました。病院側も看護研究にとりくむ重要性の認識はあるが、職員の研究に対する知識やモチベーションは様々であり、スタッフの研究力強化には苦慮している現状があるため、本学教員には継続したサポートや研修のニーズが高いことなどが示されました。これらのことから、次年度以降は個別相談の場を附属病院に設定し、センターが出張して積極的に研究相談やサポートを行っていききたいと考えています。

地域住民を対象とした活動は、今年度も盛況であり、地域住民のニーズが的確に捉えられた事業であったと考えます。次年度以降、さらに地域住民の皆様の期待に応えられるよう、遠隔開催も含め、さらに充実させていくことが必要と考えます。

コロナ禍以降、zoom を用いた講義やオンデマンド配信でのセミナー開催が日常的なものとなりました。今年度も青森県や沖縄県など日本全国からオンライン参加がありました。今後もそれぞれの開催方法のメリット・デメリットを踏まえ、各々の事業にとって適切な開催方法を見極めて、参加者数の増加を図っていききたいと考えております。

今後も地域社会の発展に貢献できるよう努力して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

令和 6 年度看護地域連携センター運営委員会

センター長	久保田正和（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
運営委員	金子 典代（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	秋山 明子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	石川 裕子（名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院看護部）
	今福輪太郎（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	大橋 麗子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	鏡 裕行（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	桂田 久子（名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院看護部）
	江 啓発（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	小塚 亜矢（名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部）
	小山 晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	高倉 直美（名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部）
	中村 美鈴（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	保田ひとみ（名古屋市立大学大学院看護学研究科）
	峯 恵（名古屋市立大学病院看護部）
	山吹 美貴（名古屋市立大学病院看護部）
事務職員	小林真理子、豊島行男

名古屋市立大学看護地域連携センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1 番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>